

研究成果の紹介

1 加工・業務用大玉キャベツの品種選定と収穫期間延長技術の開発

ねらいと成果

キャベツは生産量の約半量が加工・業務用に使用されており、加工業者などの実需者が望むキャベツは寒玉系品種で、家庭消費用より大玉で結球内に葉が詰まったものである。

前報（No.156）では冬どり品種の選定等を報告した。今回は、10月～6月の各作型で加工・業務用に適する品種選定を行った。また、収穫作業の省力化や分散化も課題となっており、秋どり及び冬どりで平均結球重2kg以上の大玉の一斉収穫が可能な期間は、栽植密度3,700株/10aが4,170株/10aに比べて2倍程度長くなることが分かった。栽植密度を低くすれば収穫期間が延長でき、労働力や経営内容に合わせ柔軟に収穫作業を行えることを明らかにした。

内容

収穫時期ごとに品種比較試験（育苗128穴セルトレイ使用）を実施した。10月収穫では早生性が高い「征将」と「凜」、11月収穫では裂球しにくい「おきな」、12月収穫では肥大性が良い「冬藍」、1～3月収穫では「夢舞台」と「彩音」、6月収穫では肥大性はやや劣るが早生性が高い「初恋」と肥大性が良く芯が小さい「YR天空」を選定した（図1）。

全国的に生産量が少ない4月収穫では晩抽性の「冬のぼり」、5月収穫（10月は種）では肥大性が良い「さつき女王」が有望であるが、加西市では需要が多いゴールデンウィーク前後に収穫できなかった。この時期の収穫には、「さつき女王」を当地より温暖な地域で栽培する必要がある。

次に、収穫作業の省力化と分散を目的に、一斉収

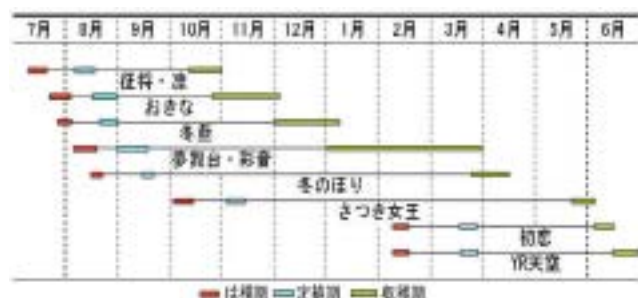


図1 加工・業務用の大玉栽培に適する品種と作型（加西市）

穫が可能な期間（収穫可能期間）の推定を試みた。作型と栽植密度による違いをみるために、試験は秋どりと冬どりでを行い、栽植密度は3,700株/10a（秋どり：畝幅135cm、株間40cm、冬どり：同120cm、45cm、1畝2条植え）及び4,170株/10a（同120cm、40cm）とした。収穫可能期間は2kg以上の大玉になった時点から裂球が始まるまでとした。その結果、収穫可能期間は秋どりの3,700株で7日、4,170株で3日、冬どりの3,700株で21日、4,170株で10日となり、3,700株では4,170株に比べて約2倍長くなった（図2）。

以上のことから、栽植密度を低くすることで大玉での収穫可能期間を延長できることが明らかとなった。この方法は結球肥大が早く、収穫可能期間が短い秋どりの作型で特に有効である。

普及上の注意事項

目標収量を得るためには、優良苗の選別や適切な防除などによる株数の確保が重要である。また、出荷時期に合わせた栽植密度の設定等作付け計画の事前検討を十分に行う。

斎藤 隆雄（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2425）

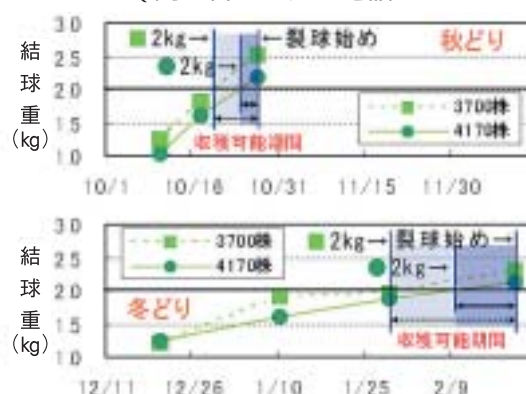


図2 作型と栽植密度の違いが大玉キャベツの収穫可能期間に及ぼす影響

秋どり：品種「おきな」は種：2008/7/22 定植；8/20

冬どり：品種「夢舞台」は種：2007/8/15 定植；9/7

矢印は収穫可能期間を表す。

..... 3,700株/10a

———— 4,170株/10a